市民環境問題講演会「トリチウム汚染水海洋排出の危険性」報告書

講師：　元福島第一原発設計者　工学博士　渡辺敦雄さん

たまあじさいの会　古澤省吾

2021 年 3 月 6 日（土）市民環境問題講演会「トリチウム汚染水海洋排出の危険性」（共催：日の出の森・支える会　たまあじさいの会　協賛：日の出の森・水・命の会）を、初のテレワーク（zoom、オンライン会議）で開催しました。講師は渡辺敦雄さんです。(プロフィール参照)

《渡辺敦雄氏プロフィール》1947 年上野原市生まれ。1971 年東京大学工学部卒、株式会社東芝入社。原子力事業部配属　（福島第一原子力発電所 3，5 号機、女川原子力発電所 1 号機、浜岡原子力発電所 1，2，3 号機の基本設計担当）。1998 年環境技術部長。2000 年神戸大学客員教授。2009 年沼 津高専 物質工学科教授(2012 年退職)。現在山梨地方自治研究所副理事長。
専門：原子力工学、危機管理学、環境工学

なぜ原発の設計者だった人が、脱原発に転じられたのか？

原発に対する疑問は、1979 年の Three Mile 島の炉心溶融の惨事が契機だった。そして東芝社内では 1991 年に原発の担当部署を自らの希望で外れ、原発は事故を起こすとその規模や質からも世界の終わりともなりかねない。人類はこの原子力を到底制御出来ない。

たとえ出来たとしても、世界の終焉をもたらすようなものは扱うべきではないはずの、自分が手掛けた仕事が、天災、人災だろうと結果として破局の災害をもたらしてしまった。

ヒトとして反省の仕方には、ひたすら内面に向かう静かな消極的な生き方もあるが、もう二度と同じ過ちを繰り返さない、自身の専門知識と経験を生かし、積極的に責任を果たす生き方があるが、渡辺さんは後者を選択されたわけです。日本の原発事情に精通されていて反原発に取り組まれている専門技術者の貴重な一人です。

現在日本の原発発電量は事故後全体の僅か１％の二百万キロのみ。それでも原発再稼働を国はなぜ急ぐのか。かたやドイツは 2022 年に 22 基あった原発の全廃が確定している。

今回のテーマであるトリチウム汚染水の処理について

「トリチウムという放射性物質はβ線で、ホールボディカウンターなど一般的な内部被ばく測定装置では、検出ができない。もし人体に取り込まれたら、知らないうちに、内部被ばくを起こす危険なもの。それを海洋に放出したら、光合成により『有機結合型トリチウム』となり、海洋植物に取り込まれ、食物連鎖、生物濃縮による危険性。漁業だけでなく、何れは人間に還ってくる。原発の安全性というものは、住民が被ばくしないことなのである。

結論は、原発事故による放射能汚染物は暫くの間（少なくとも 50 年間）は地上に保管するしかないことへ導かれた。現在の汚染水発生はピーク時の 1/5 程度の日量 100 t に減っている。幸いさらに減る傾向にあるので（鳴り物入りの最新技術凍土壁の効果はほとんどなし）、先生の意見は、福島第二原発内にタンクを設置して保管するのが、安全性、技術面からも目下最善の解決策で、海洋放出はあってはならないとのとても判りやすい結論でした。

技術・経済的見地よりも倫理で（算盤より論語）

来年にも原発を全廃するドイツと、これだけの重大事故の当事者で被害者なのに責任追及も反省もないまま、懲りずに再稼働を増やしてゆく日本との違いは何なのか？にも言及されました。それは、日本は技術・経済界の専門家が議論しているが、ドイツでは哲学・倫理・教育面の権威たちが議論している。未来を背負う子供たち、後世に何を残すか。
それ以上に大切なことがあるだろうか。どちらが正しいか。誰にも判る簡単な命題です。
オンライン参加者との質疑応答もていねいで、時間を掛けられました（内容は割愛させて頂きます）。渡辺さんと、今回参加ご協力頂いた皆さん、本当に有難うございました。　　以上

〖講師の渡辺さんが目下取り組まれていることにご注目〗

参考として東電株主代表訴訟、第５７回口頭弁論証人尋問後の記者会見

渡辺さんも証人として出廷された２月 26 日の東電株主代表訴訟、第５７回口頭弁論証人尋問後の記者会見を見ることが出来ます。https://www.youtube.com/watch?v=3Vx5kEsdtqg

この東電株主代表訴訟は、株主が原発事故当事者の元の取締役に対して、事故の責任、経営者責任、債務超過、債務不履行、破綻の危機を問い、東京電力株式会社に対しての約２０兆円の損害賠償責任を求めるものです。渡辺先生は東電の嘘を、技術面から暴く証人で、そこには事業者が絶対に負うべき安全の文化、Saftey Culture の欠如と、CS（顧客満足）思想の貧困を指摘されています。これでは経営者責任を免れることは出来ません。同僚の技術者も専門家の自負と誇りからこの記者会見で、次の発言をされていました。『津波や地震や自然現象には人間の制御は効かない。（そのための事故が）起きるのはやむを得ない、責められない。しかし原子力発電が持つ固有の特性は、地震や津波で影響を受けて良いものではない。これを克服できないのであれば、原子力発電所は止めるしかない』でした。

講演報告人の愚痴**「アホな政府を選ぶ日本の主権者、当たり前のことが何故できないのか？」**

結局、人類は貪欲で強欲でバカな生き物だから？　でも、少なくとも原発の問題ではドイツはヒトらしい道を歩んでいる。ならば天に唾するようなもので言いたくはないけど！

今こそ日本人自らが問われなければいけない、猛省しなければいけない問題です。

ドイツ国民と政府は対岸の火事を見て、火の用心を徹底することに決めた。一方火災を起こした張本人、日本の政府と大半の国民は、喉元も過ぎてないのにもう熱さを忘れている。中には除染事業などで焼け太りしている連中をみて、オレもあやかりたい狂騒曲。

「火元の親分の責任追及はまずい。復興の仕事から干される。今が仕合せなら、みんなで渡れば怖くない。空気を読めない、忖度できない、と笑われる。国の親分たちは、周りを放射能と疑惑隠蔽の真っ黒な国にして、『美しい国、ニッポン』だって！哲学、倫理意識欠如なんすかね。」それって漢字も読めなかったＡ首相やＡ大臣のこと？　やっぱ子供には見せられませんね。

（編集文責　濱田光一）